異笵・同笵
あれこれ

1997年度に飛鳥藤原宮跡発掘調査部がおこなった同笵軒丸瓦の調査例を紹介する。

川原寺創建軒丸瓦601型式C種の異同　川原寺の創建軒丸瓦は、面違鋸歯紋縁の複弁八弁蓮華紋軒丸瓦、いわゆる川原寺式軒丸瓦である。『川原寺発掘調査報告』（奈文研学報第9冊、1960年）では、この軒丸瓦を601型式と名付け、A～Eの5種（報告では「類」）に細分した。A～Dは中房蓮子が1+5+9、Eだけが1+4+9。Aは鋸歯紋の幅が広く、B～Dは細かい。A·C·Dは鋸歯紋の三角面右側に段があるが、Bは左側に段がある。また、Eの鋸歯紋はほとんど消えている（ないし下書き線だけで素紋縁）。C·Dは瓦当面の作りは同じだが、瓦当裏面の作りで区別した。

その後、金子裕之氏はC·D種両者が同笵とみてDを消去、601型式をA～C·Eの4種とした。C·Dの技法差はEにも存在するので、製作技法をⅠ～Ⅲ型に分類し、瓦笵分類と組み合わせる細分案を示した（「軒瓦製作技法に関する二、三の問題－川原寺の軒丸瓦を中心として－」『文化財論叢』1983年）。

これに対し、山崎信二氏はこのC·D同笵案を疑問視し、「Cと分類したものは、さらに2つの笵型に分類できる可能性が高い。」と述べた（「藤原宮造瓦と藤原宮の時期の各地の造瓦」『文化財論叢Ⅱ』1995年）。

『報告』で601C·Dとした軒丸瓦は、瓦笵1個なのか2個なのか。結論は、途中で巧妙な修復を経た瓦笵1個。この瓦笵は、手直しと磨耗の状況によって、5段階に区分できる。

第1段階：傷や磨耗がほとんどない。第2段階：蓮子周環を彫り直す。周環の中には不整形になるものがある（図1a）。第3段階：中房に木目が浮き出す。弁区にも細かな木目が浮き出す。第4段階：弁端と外区との間に大きな笵傷が現れ、まもなく2個になる（図1b）。第5段階：笵傷を埋め木して修復する（図1c）。

山崎氏が「外縁に大きく2箇所笵傷のあるもの」としたのが第4段階、「瓦当笵の磨耗したものの中に、外縁に笵傷のないものが認められる」とみたのが第5段階。第4·5段階に共通する笵傷があり、同笵は間違いない。笵傷を隠した修復はきわめて巧妙だが、埋め木の隙間が細い凸線としてみえる。また、第5段階と第3段階以前の製品と比較すると、修理した2つの花弁は、弁端の切れ込みと弁央の稜線との位置関係が、ほんのわずかだが変わっている。上手の手からも水は漏れる。

さて、瓦笵の割れを埋め木して修復した例は、法隆寺の平安時代中期の軒丸瓦38型式B種がある。こちらは仕事が雑だったのか、のちに埋め木がはずれてしまう。

また、藤原宮の軒平瓦6646型式A種の瓦笵は、上外区珠紋の左端が一部脱落してしまったので、はずれた部分を再度はめ込んだ。ところが、あわてたのか左右を逆に戻してしまい、珠紋の形や界線がいびつになった。これはちょっとまぬけな瓦笵修復の一例である（図2）。

船橋廃寺と飛鳥寺・興福寺の同笵瓦　河内·船橋廃寺からは花組の素弁蓮華紋軒丸瓦の断片が出土しており、これは長く素弁十弁の飛鳥寺Ⅰ型式と同笵だと考えられてきた（『柏原市史』第1巻など）。この資料を含むコレクションは現在、大阪府立弥生文化博物館に所蔵される。以前、個人所蔵だった段階で一部を報告したことがある（『年報1987』）が、紹介が漏れていたので補足したい（調査と写真撮影·掲載については、同館林日佐子氏と大阪府教委森井貞雄氏のご協力をえた）。

問題の瓦は、蓮弁1枚分だけの断片でしかも弁端部分しかない。これを飛鳥寺Ⅰ型式と比べると、弁端の切れ込みがかなり長く、弁幅も大きい。間弁先端の形も違う。異笵だ（図3a）。そこで、素弁八弁の飛鳥寺Ⅱ型式と照合した。笵傷の対比ができず絶対確実とはいえないが、まず同笵とみてよいだろう（図3b）。

この飛鳥寺Ⅱ型式、飛鳥寺ではこれまでわずかに1点しか出土が確認されていない。飛鳥寺の所用瓦ではなく、河内·衣縫廃寺の創建軒丸瓦だからだ。衣縫廃寺と飛鳥寺Ⅱ型式とは笵傷が一致し同笵は確実。つまり、飛鳥寺·船橋廃寺とも衣縫廃寺からその創建瓦の製品供給を受けた結果の間接的な同笵関係であって、互いが直接に瓦をやりとりした結果ではない。また、船橋廃寺からは「高句麗系」とよばれる弁間に珠紋を配置する軒丸瓦が2点みつかってい、大和·豊浦寺との関係を示唆する意見もある。だが、いずれも豊浦寺とは異笵で、むしろ衣縫廃寺や渋川廃寺といった近在の寺との同笵の可能性を探るべきだ。

図１　川原寺軒丸瓦601Cの瓦笵修復

図２　6646A細部

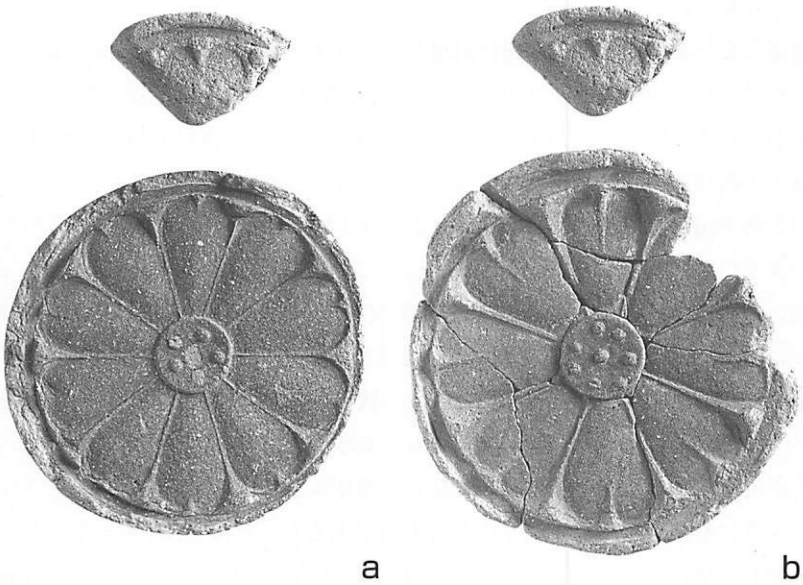

図３　船橋廃寺の瓦（上）と飛鳥寺の瓦（下）との比較

図４　船橋廃寺（上）と興福寺（下）の6307J

船橋廃寺には奈良時代に平城京同笵の瓦がある。これは、複弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、平城6307型式J種と同笵。胎土や焼きの具合は、比較した興福寺例に類似し、興福寺からの製品供給らしい（図４）。

軒丸瓦6307型式J種は軒平瓦6682型式E種と組み合い、興福寺のほか、下野薬師寺と播磨･溝口廃寺、播磨･本町遺跡からも出土する。奈良時代で最も広範な同笵関係をもつ軒丸瓦といえよう。このセットを詳しく検討した山崎信二氏は藤原武智麻呂の動向をその背景に想定した（『平城宮･京と同笵の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察』1994年）。船橋廃寺と武智麻呂との関連を立証する史料はないものの、この時期の船橋廃寺には、平城宮から軒丸瓦6282型式Ba種と軒平瓦6721型式C種が持ち込まれる。これは、平城宮･恭仁宮･法華寺などに使われた瓦だ。

どうやら、７世紀には紋様こそ中央の飛鳥に近似しながらも在地寺院との受給関係を濃厚に示していたこの遺跡が、奈良時代になると中央と直接の関係を結ぶに至ったように思える。河内ではこのほかに、新堂廃寺に軒平瓦6671型式A種と6667型式A種がある。前者は興福寺創建軒平瓦、後者は藤原不比等邸ないし皇后宮所用。となると、すでに山崎氏が指摘されているように、二つの寺から出土する平城京と同笵の軒瓦は、今のところ不比等邸･皇后宮･興福寺・法華寺など藤原氏と密接な関係を持つ遺跡の瓦に限られていることがわかる。この事実は、船橋廃寺の性格解明に多少裨益するところがあるやもしれない。

（花谷　浩／藤原調査部）